【所　　感】

長崎市議会議員　野口　三孝

三カ国四都市を訪問し、環境問題を調査し先ず感じたことは、いずれの国、都市（地域）においても、その取り組む体制は違っても真正面から向きあっていた。

ドイツのフランクフルトはドイツ連邦銀行があり、ヘッセン州の一都市であるが、廃棄物処理・再生資源の回収処理は、近隣２２市町村で、日本流に言えば公社的組織体でその業にあたっている。

視察中、頻繁にトレーラを引いた自家用車が建築廃材、電化製品、剪定樹木を搬入していたが、電化製品はメーカが処理費を負い、ドイツ人は家の改築は自分でするとのことで、費用は有料だがお国柄をかいまみた。

カールスルーエ市は、緑化に関する調査であったが、街が緑の中にあるとでも言える、うらやましい程の緑に覆われた人口約２８万の都市。

市の緑に対する取り組み方も、そこまでと思う程で、景観計画部というポジションが年間日本円にして約３６億円の市有林、緑地帯の管理費と更に約３億６千万円を緑化の新規事業に投資している。

スイスでは、２００５年にアーレ川が氾濫し大洪水に見舞われた教訓から、アーレ川の改修を視察。いずこの国も同じだが、流域住民、関係団体との話し合い、その要望を聞くのが大変とのことであるが、感心したのは、改修をセメントで固めるのではなく、自然のまま改修し、また復元していた。

視察をし、感じたことは、いずれの国・地方もその事業形態に違いはあっても環境行政に対する熱意は厚く、そのことは国民・地域住民の環境に対する思いの反映であろう。本市においても緑化を始め環境に対する市民への意識改革を更に努力すべきと思う。

以上